いきいき てくてく 愛媛 in 久万高原

本紙創刊150周年企画

山あいの学びやに若者の声がこだまし、情熱がほとばしる―。久万高原町上野尻の上浮穴高校には地元や県内に限らず、全国から生徒が集まって共に学び、地域素材に着目した実践活動や研究にいそしむ。活動は学校を飛び出し、地域に溶け込んで住民と一緒に久万高原町を元気にしようと奔走する。住民に「上高（かみこう）」と呼ばれ親しまれる上浮穴高の生徒の日常を追い、その意気と熱心を伝えよう。

（清家香奈恵、山根健一）

「よりどころ」生徒主役

上浮穴高・星天寮

地域に溶け込み 商店街行事協力

上浮穴高校から歩いて5分ほど。畑や住宅、小学校に囲まれる中に学生寮「星天寮」（久万高原町上野尻、定員30人）がある。町外出身者らがここを拠点に勉学や部活動、地域活動に励み、青春を送っている。

2月中旬の週末。寮1階の食堂では、寮生が作った焼き菓子に「おいしい」などと、どっとにぎやかな声が響いた。期末考査へ向けてテーブルに問題集を開いて勉強する人に、暖炉のそばに座ってスマートフォン片手にゆったりする人も。思い思いの休日を過ごしていた。

上浮穴高では2020年4月、森林環境科で全国募集による生徒受け入れを開始。高校存続へ学校の魅力向上につなげようと、町は星天寮整備へ2億1073万円を投じ、20年3月に完成した。23年4月入学生から全国募集を普通科にも広げた。

24年春に入寮したチェンシィー未明フィデリアさん(17)＝森林環境科3年、愛知県出身＝は林業を学べる学校を探していたところ、寮の雰囲気が決め手となり同校を選んだ。「一人じゃない。気が楽」と、自室の外で過ごす時間が当初思っていたより長くなっている。

授業のある日は午前7時の点呼に間に合うよう起床。掃除し朝食を食べ登校。授業を終えて帰宅し夕食。自室や共同スペースで自習し、合間に入浴や洗濯を済ませる。放課後や休日は部活動、生徒会、地域行事で忙しい寮生も少なくない。

人口減少が著しく、高齢化率が50％を超える久万高原町で、同校生は地域を支える貴重な存在だ。約1万体のひな人形が町中心部に並ぶ恒例の「くままちひなまつり」（5日まで）では23年から全校生徒が準備・片付けに協力。今年も1月下旬、商店街には寮生を含む生徒が代わる代わる集まった。

「向き、どのくらい？」「ゆがんでいない？」。主会場のあけぼの座では、飾り棚を組み立てたり、人形を出して飾ったり。運営委員の住民が荷物を抱えて運ぼうとするとすかさず「任せてください！」。顔見知りも多く「今何年生？来年も来られる？」。温かな空気が広がった。

春は別れの季節。3年生は3年間の思い入れが重なる分、寂しさを伴う。2年生が中心になって企画した2月28日の卒寮式。「家族以外の大人で自分にとっての味方が初めてだった」「（専門学校卒業後）戻ってきて寮で働きたい」。卒業式を翌日に控えた卒寮生9人が涙を拭い、声を震わせ感謝や思いを伝えた。

「高校に行くために寝泊まりする施設」にはしたくない。卒寮しても帰ってこられる場所、よりどころになったらいい」。寮ができた時から寮母を務める宇都宮美玲さん(54)＝松山市＝は思いを語る。寮生は宇都宮さんの思いに応えるかのように、生徒が主役の寮として、自ら考えルールの見直しなども進めてきた。

少子化が進み、生徒を全国募集する高校が増える中、26年度入学志願者の最終倍率は森林環境科で1・00倍となった。全校生徒の4人に1人は県外出身だ。入寮希望者は空き室数を上回り、今春からは民間物件のシェアハウスで生活を始める町外出身生徒も星天寮整備後では初めて出る。

この春に寮長となった野口瑠月さん(17)＝森林環境科3年、埼玉県出身＝は「（星天寮の仲間は）家族と言えば家族なのかな」と話す。「私たちの代のいいところ、個性を出しながら、楽しく仲のいい寮にしていきたい」

星天寮の卒寮式を終え、集合写真に納まる寮生たち＝2月28日、久万高原町上野尻

花吹雪が舞う中を退場する卒寮生＝2月28日、久万高原町上野尻

㊤期末考査へ向けた勉強の途中、寮生らと歓談し笑顔のチェンシィー未明フィデリアさん（手前左から3人目）＝2月中旬、久万高原町上野尻㊦あけぼの座でくままちひなまつりの準備作業に当たる野口瑠月さん（右）＝1月下旬、久万高原町久万

自然と気配り身に付く 前寮長・牧慧太さん

牧 慧太さん

「大阪の大規模校だと先生の目が生徒に行き届かず、落ちこぼれるのではないかと危機感があった。自立したい思いもあった」。大阪府から上浮穴高校に進み、3年時の昨年度は星天寮寮長を務めた愛媛大1年、牧慧太さん(18)が高校進学時を振り返る。

「人とすぐ親しくなれる性格」もあり、親元を離れる不安はなかった。寮の先輩たちは1年生を気遣い積極的に話しかけてくれ、自身も上級生になると後輩に気をかけるという継承の文化があった。

「最初の頃は嫌なことがあればすぐ文句を言っていたが、丸くなったと言われる」と笑う。少人数の社会だから、気付かぬうちに気配りすることが身に付いたのかもしれないと感じる。

中学時代は「人生を浪費していた」が、高校では何でも積極的にやるようになった。思い出深いのが面河での茶摘みのインターンシップ（就業体験）。地域の人は温かく迎えてくれ、求めに応じ働くのが心地よかった。同時に過疎化が進む中で、住民は幸せを感じ楽しく暮らしているのが印象に残った。このことが進路に影響を与える。

愛媛大では社会共創学部環境デザイン学科に籍を置く。「地域の終活」をテーマに研究する考えだ。

特産 久万大豆生かす

生徒有志「くまもるず」

根から菌分離／きなこプリン開発

「ろ紙をピンセットでつかみ、放線菌の培養液抽出物につけてから酵母菌を混ぜた培地に軽く押しあててください」。2月中旬、人間環境大松山道後キャンパス（松山市道後樋又）の一室では中島琢自教授（応用微生物）が上浮穴高校の生徒有志でつくる「くまもるず」メンバーに実験方法を説明し、生徒は手際よく作業を進めていった。1957年に作出された久万高原町特産の地大豆・久万大豆を使った共同研究の一こまだ。

「くまもるず」は地雑穀を使ったカレーやナン作りに取り組み、「幻」といわれた久万大豆の栽培を手がけるなど、地元素材の魅力を再発掘している。この流れで人間環境大との共同研究は昨夏に始まった。

放線菌は土壌や植物の根から採取できる細菌で、数百属あるといわれ、薬品開発や堆肥化などに利用される。同大学でくまもるずは久万大豆の根から放線菌を分離、培養し、どのような有用性を持っているのかを探っている。

2月の実験では、中島教授が「放線菌から抗がん剤も作られています」と説明すると、生徒は「すごい」と感嘆の声を上げ、自分たちが手がける研究の重要性を改めて認識。実際、久万大豆から得た放線菌を使って同大学と企業が農薬開発を進めるなど、実用への可能性が見え始めている。

現在、森林環境科3年奥田歩未来さん(18)＝大阪府出身＝は「大学での研究についていけるかどうか不安だったが、大豆の可能性の広がりを感じている」。同科2年の生駒彩乃さん(16)＝東京都出身＝は「放線菌研究に知的好奇心を刺激される」と言い「何をやっていいか分からないこともあるけれど、実験が好き」と手応えを感じる。

中島教授は「放線菌はこれから有望な研究対象。一人でも専門に進んでくれれば」と期待する。

生徒は地元での久万大豆普及の役割も担う。3月中旬、久万高原町久万の久万町民館では町農業経営者協議会女性部「耕楽」のメンバー10人ほどが参加した豆腐作り体験会で、指導役を任された。くまもるず唯一の久万高原町出身者、森林環境科3年山本琴美さん(17)は「自分の地元の素材を栽培し、それで商品開発するのは大変だけれど、楽しい」と顔をほころばせる。耕楽の正岡千代子会長(72)は高校生の活躍に「すごいね」と感嘆した。

生徒3人の今後の目標は「高校生カフェ」。本年度から具体的に動かす予定で、町内で定期的にカフェを開き、雑穀カレー、久万大豆のきなこを使ったプリンなどの販売を模索する。地元にこだわった活動は新たな展開を見せる。

久万高原町 2004年、上浮穴郡久万町、面河村、美川村、柳谷村の4町村が合併して誕生した。面積は県内市町で最大の583・69平方キロ、人口は6084人（3月1日現在推計人口）。標高は平均約800メートルで、夏の涼しさから「四国の軽井沢」とも呼ばれる。石鎚山、面河渓、四国カルストなどの自然環境にも恵まれる。町内を北西から南東にかけて走る国道33号は、松山市と高知市を結ぶ動脈として機能する。

中島琢自教授（奥）の指導を受け、放線菌の有用性を調べるくまもるずメンバー＝3月中旬、松山市道後樋又の人間環境大

久万大豆で豆腐を作るくまもるずメンバー（手前右）と農家の女性＝3月中旬、久万高原町久万の久万町民館

＜次回は11日に掲載＞

地元で林業を 父の背追う

森林環境科 秋山敬太さん

伐倒や造材 現場で学ぶ

チェーンソーなどの機能が付いた林業機械の操作に挑戦する秋山敬太さん＝3月上旬、久万高原町菅生

「私は将来、久万高原町で林業をしたい」。ドイツ・オーストリアで森林業などを学んできた2025年度海外研修事業の報告会に、こうつづる生徒がいた。4月に3年生となった森林環境科の秋山敬太さん(17)だ。町内で林業をなりわいとする父親の姿を見て、小学生の頃から「上高で学ぶ」「林業を仕事にする」との思いを温め続けた。

林業との出合いは小学2年生ごろ。父正俊さん(51)に、シイタケ栽培に使う原木を切り出す現場に連れて行ってもらった。人力が必要で、切り出す木の長さなど細かい規定もある。大変な仕事を、汗をかきながらこなす父は「とてもかっこよかった」。

当時の秋山さんは機械が好きな子。好奇心が高じてウインチや運搬車など林業機械への関心も高まった。新型コロナウイルス禍で小学校の臨時休校が続いた際には父に「行くか？」と誘われ、スギやヒノキの植わる現場に丸1日ついていくことが多かった。

在籍する森林環境科では2年時に専攻班を選ぶ。秋山さんは樹木の育苗から間伐、枝打ち、伐倒、造材などを身に付ける育林班。座学だけでなく週1回3時間、学校林などの現場に出る総合実習もある。

3月上旬、秋山さんの姿は県林業研究センター（同町菅生）にあった。次世代林業研修で約20人が林業現場で活用が広がるドローンや、造材・積み込みの機能を持つ林業機械の実践的知識を増やした。

「着陸の時の距離感をつかむのが難しい」。ゲーム感覚に近い和やかな雰囲気でドローンを操縦。林業機械の操作では、担当職員の助言を聞きながら慎重にアームを動かした。

もっと現場に出て「楽しく学びたい」。前向きな姿勢の中にも、学びの過程で業界の課題も見えてきた。木材需要の減少や担い手の高齢化、事業地確保の難しさ―。研修の際には機械の便利さを再認識しつつも「実際に自分が（林業を）するとなったらあそこまで（高価な）機械を持つのは難しいのかな、とか…」。

新たな視点が芽生えたのは、卒業後の姿を具体的に描き始めた証しでもある。天気の良い日曜日には父と山に入る日常が続き、経営面の話もするようになった。

機械に囲まれ、虫を見つけたり蛇に出くわしたり。うっそうとした山中が、間伐後には光が差して明るくなる。毎日違う風景が目に映り、自然の中にいるのも心地よかった。小学生時代の記憶は消えない。「好きなことを仕事にして、楽しくできるのが大事」。ふと笑みがこぼれていた。

ドローン操縦時の注意点などを聞く秋山敬太さん（右から2人目）＝3月上旬、久万高原町菅生

【紙面編集】尾上芽吹